



JSPS London

巻頭特集 今JSPS Londonがオモシロイ!

「新しい時代の知のコモンズ」 安西理事長インタビュー

2分でわかる!

英国のミッショングループ

スコットランド法でみる

イギリス国家の多様性

No.33

JSPS London

NEWSLETTER

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター 2012年5~7月 ニュースレター

センター長の視点	2	FOCUS 「世界トップクラスの大学グループ入り！」		奥村真知子 退任のごあいさつ	14
巻頭特集 今JSPS London がオモシロイ!	3	エクセター大学の挑戦	10	スタッフ写真館 今月の1枚	15
英国研究者キャリア開発の取り組み	7	Programme Introduction day in Exeter & Plymouth	11	英国学術調査報告	
ぼりーさんの英国玉手箱	7	平松幸三が伺いました!	12	2分でわかる英国のミッショングループ	16
UCL シンポジウム	8	Alumni Regional Event in Glasgow	13	JSPS Programme Information	19
Pre-Departure Seminar and Alumni Evening 開催	9	Programme Introduction day in Newcastle, Glasgow and Orkney	13		

センター長の視点

平松幸三 ロンドン研究連絡センター長



英国の大学から学ぶもうひとつのこと

英国にはオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL)、インペリアル・カレッジなど世界一流の大学が軒を連ねる。これらの大学から日本の大学が学ぶことは限りなく多いが、短大を含め 1000 校を上回る日本の大学のすべてにとってこういった世界トップレベルの大学が参考になるわけではない。英国の大学から日本が学ぶべきもうひとつのことに、辺鄙な地にある小さな大学の姿がある、と思う。

ロンドンセンターは、過去 2 年間にそういった小さな大学 3 校を訪問する機会を得た。ウェールズにあるウェールズ・トリニティ・聖デビッド大学 (University of Wales Trinity St. David) ランペター校、スコットランドにあるハイランズ・アンド・アイランズ大学 (University of Highlands and Islands) パース校とオークニー校である。

ランペター校は南西ウェールズの山間にある小さな町ランペターにあって、歴史は古く 1822 年の創立である。英国でもっとも古い大学はオックスフォード、次いでケンブリッジだが、その後スコットランドには大学が設置されたものの、イングランド・ウェールズには開設されず、ランペターが 3 番目とされる。UCL

より 4 年早い、由緒ある大学である。20 年ほど前に縁あって訪れたときは学生数が約 200 人と聞いたが、今は 500 人になっているから、2.5 倍の拡大だ。近くの大きい町というスウォンジーで、車で 1 時間程度の距離である。人文系主体のこじんまりとした大学だ。パース校は、中部スコットランドの町パース郊外にある大学で、もとは専門学校だった。料理、レフレクソロジー、ヘアドレッシング、工業デザイン、録音技術などの専門家を養成している。パートタイム学生が 5000 人というから半端ではない魅力を持っているということだ。設備でも、たとえば録音スタジオはスコットランド有数の質を誇り、プロに時間貸しをしている。オークニー校はブリテン島の最北端の離島オークニー諸島にあるカレッジ。学生数 200 人、教員 7 人の実に小さな大学で、10 年余りに設立された。オークニー諸島には 5、6 千年前の住居跡や遺跡がおびただしく残っているので考古学、スカンジナビアとのつながりが歴史的に強いので北方研究、地味が肥えていて農業が盛んなので農学といった領域の教員「7 人の侍」たちが目を見張る活力で高度の研究レベルを維持しているのには舌を巻いた。なんと、博士課程を持っているのだ。聞くと、大学院生は世界中から来る、という。小さいながらも、教育の拠点として、知の発信拠点としてしっかりと役割を果たしている。

地理的に大都市から離れたところにある、小さな大学は日本にも数多くあるが、それらが英国のこういった小さな大学から学ぶことは多い、と思う。日本では経済的理由から、加えて女性の場合は親の希望があって、地元の大学に進学する傾向が強い。地方にある小さな大学は、財政的にも人材的にも強くないところが多いから、研究より教育が重視される傾向にあるのはいたしかたないところであろう。こういう大学では、多くの非常勤講師を雇って授業を担当させているが、とぜん常勤教員も多岐にわたる科目を担当しなければならぬし、学事業務を担当することもまれではない。厳しい言い方をすれば、高等学校の延長のようになっていて、教員が研究に割く時間がおのずから制限されてくるし、ひどい場合には、研究すると疎まれることさえある。結果、教員の質も、教育の質も維持しがたくなるのが実情であろう。

私はこういった地方の小さな大学の存在を貶めるつもりはない。社会的に存在する理由、学生の需要があるからこそこれまで存在してきたのだ。日本の教育レベルの底上げに果たした貢献は無視できないものがあるだろう。一方、英国の同様な大学のすべてを褒めたたえるつもりもない。英国の大学教員のすべてがすぐれた研究者、学者ではないことも自身の経験から承知している。

それにもかかわらず、上に挙げたよう

な英国の小さな大学を見ると、日本にはなぜこのような大学が存在しないか、という疑問を禁じ得ない。英国でこのような小さな地方大学が活発に存在する理由を詳しく調べてみたいものだが、とりあえずひとつの理由として挙げることができるのは、英国の大学におけるデジタル化の浸透だ。これは地理的なハンディを克服しやすくする。あとひとつは教員の意欲・志操の高いことが挙げられる。装置があっても、それを使いこなす意欲がなければ、宝の持ち腐れに終わる。パースの大学は、完全に職業教育学校だが、その範囲では世界に通用する教育を施そうとする意欲を感じたし、オークニーは、天の秋、地の利、人の和があったと聞いたが、教員の志の高さには感じ入った。

日本でも地方にある一部の大学が健闘していることは知っている。小規模で質の高い教育・研究を行っている都会の大学も知っている。けれども、もっとも多くの、地方の小規模大学が、やりようによってはさらに質を上げることができるのではあるまいか。英国の大学から学ぶことのもうひとつだ、と思う。

「新しい時代の知のコモンズ」 安西理事長インタビュー



2011年10月、本会理事長に就任した安西祐一郎理事長が6月6日に訪英し、当センターを訪れました。この機に、大学の国際化とJSPSについて、また創立80周年にあたるJSPSの今後のあり方について、当センター長平松幸三が聞きました。

－ 大学の国際化と JSPS

平松：早速ですが、JSPSにとって大学の国際化というのは、どうとらえたらよいかをお聞かせ下さい。

安西：大変重要な設問だと思います。今、日本の大学は急速に外国の大学との国際交流を進めつつあります。単にMOUを結ぶだけでなく、研究者の派遣、学生交流、ダブル・ディグリーとジョイント・ディグリーのプログラムを含めて、急速な展開があります。

その一方では、本当に日本の大学の国際化はまだまだで、例えば、外国人教員の比率は極めて低く、外国人学生の比率もかなり低い。ということは、日本の大学で学ぶときに、多様な人達とコミュニケーションを取りながら、切磋琢磨するという環境にないということです。ですから「国際交流」は進んでいるけれども、「国際化」はほとんどできていないと言っていると思います。

もう一つ申し上げますと、いわゆる先進国の研究機関や大学との交流、それから発展途上国の大学との交流は、多少区別して考える必要があります。前者はただ交流するレベルから遥かに話は進んでいて、実りがあるところとしか一緒に仕事をしないという傾向があり、後者の発展途上国については、個別の学術の発展と言うよりも、組織と組織の関係を結びたいという傾向が強く見受けられます。

その両方に対してJSPSは、学問の発展の支援をし、またリードすることが、最も大事なミッションだと思います。実りのある国際連携を支援していく必要があるでしょうし、発展途上国につきましては、相手の大学の情報を日本の大学に提供して、日本の大学が連携するときの支援をすることが重要です。日本の大学は自分達で外国の大学と連携できる時代になっています。ですから海外研究連絡センターは、かなり先進的な学術研究機関や大学と連携を図るときの拠点となり、より高いレベルの情報を収集・分析し、



安西祐一郎 Yuichiro Anzai, Ph.D.

日本学術振興会理事長。

1974年慶應義塾大学大学院博士課程修了、工学博士。

カーネギーメロン大学客員助教授、北海道大学文学部助教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て、93年～2001年同理工学部長、01～09年慶應義塾長。

現在、文部科学省中央教育審議会大学分科会長等を務める。

日本私立大学連盟会長、環太平洋大学協会会長、情報処理学会会長、日本認知科学学会会長等を歴任。

専門は認知科学、情報科学。



日本の大学が独自にできる以上のことをする必要が高まってきているように思います。

平松：いわゆる発展途上国の大学との交流ですが、こちらが調査させていただくときに、協定を結んでいると何かとやりやすいという便宜性があり、同時にその学生や教員に日本に来ていただいて、学び、研究していただくということがよくありますね。また、「中進国」と言う言

葉を使っていいかどうか分かりませんが、近年そういう国の一部に、大学に力を入れ始めた所があります。JSPSとしてはそういう状況をどうお考えでしょうか。

安西：たとえば東南アジアで言えば、私の見るところでは、ベトナムやタイのトップレベルの大学に対しては、それぞれの国の事情がありますが、個別に連携ができる状況にあるので、JSPSが支援することは有意義だと思います。

平松：話は戻りますが、日本の大学の国際化促進に対して、JSPSは特に何ができるのでしょうか。

安西：日本の大学の国際化が進んでいない証拠に、国際共同研究の論文数の伸び率が低いということがあります。もちろん少しは伸びていますが、他のいわゆる先進国に比べて低い。そういう状況を考えると、国際共同研究のサポートに力を入れて行くことは大事だと思います。具体的には、JSPSとして、どういう大学同

士、あるいは、どういう研究者同士が組めばいいのかということまで立ち入って、色々な助言をすることが鍵になっていくでしょう。

それからもう一つは、グローバル・イシューです。災害、気候変動、資源問題、人口問題、感染症や健康問題などについて、広い意味でのテーマを持ちながら、若い研究者や大学院の学生の交流、共同研究の支援に力を入れていくことも望まれます。その意味では、どこの大学にどういうハイレベルの研究者がいるか、というデータベースを作る必要があると思います。

さらに、今の時代は研究の時間サイクルが非常に速くなっていて、その対応も迫られています。「リサーチゲート」というのはご存じですか？論文を公表すると著作権に注意しないといけないので、友人同士が交換しているという形で論文を流す、いわば研究者のコモンズのような状況が生まれてきています。その中でJSPSは何ができるのかと考えると、やはり「デー



タベースの整備」が非常に有効だと思います。

－ 新しい時代の知のコモンズ

平松：今年JSPSは80周年を迎えますが、この節目の年をどのようにお考えになりますか？

安西：JSPSは1932年12月、当時の天皇陛下の御下賜金によって創設された由





平松 幸三 Professor Kozo Hiramatsu

日本学術振興会ロンドン研究連絡センター長。京都大学工学博士、京都大学名誉教授。武庫川女子大学教授、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授等を経て、2010年5月より現職。専門分野は音響環境学。

緒ある学術振興機関です。1929年アメリカの大恐慌で、1930年昭和恐慌という時期に、学術振興の組織ができたというのは、大変責任も重く、またJSPSが有意義な機関だということを80周年を機に、JSPSを始め、多くの人達がもう一度認識すべきことだと思います。今、世界的に経済が不況な時代ですが、そういう中でこそ学術の振興を着実に粘り強く進めていくことで、これからの時代のソフトインフラを形成していくのです。日本が他の国と手を取り合って、広い意味での安全保障、つまり新しい時代のソフトインフラを作り上げていく上で、JSPS 80年の歴史とこれからのあり方というのは、日本にとっても世界にとっても大切なものになると思っています。JSPS 80周年の意義はそういうことだと思います。

では、80周年を機にJSPSはどうしていくのかと言うと、やはり学術、平たく言えば「知識を生み出していく」、「Production of knowledge」を重視したいです。日本では今、大学が知の生産の場だということが言われなくなってきました。旧帝大系は別かもしれませんが、日本には短大も含めると大学は



1000以上あり、やれ定員が割れているとか、大学教育は何やっているのだとか、そういうことは言われますが、大学が本当に知の生産の場として、これからの時代のソフト・インフラストラクチャーを作り出していく、一番源泉になる、という問題意識が薄くなっていると思います。

知の生産のあり方には2種類あります。一つは、グローバル化、フラット化の傾

向の中で、人類全体にとってクリエイティブな意味での知を生み出していく「個人」がとても大事になっています。それと実は矛盾しないのですが、もう一つは「チーム」で知を作り出していくということです。この両方が極めて顕著になってきていると思います。

それから先程言いましたように、時間のサイクルが速くなっています。情報の

流通スピードがものすごく速くなっていて、社会科学の分野といえども、グローバルな世界で情報が流通する中、クリエイティブな知を作り出していかねばならないのが現状です。そういう中でJSPSは80周年を機に、今申し上げた意味での学術のあり方をバックアップしていくことが役割と言えます。

平松：そうですね。

安西：今まで申し上げてきたのは研究のサポートについてですが、JSPSの課題としては国際事業と研究事業を太いパイプでつなぐことが挙げられます。JSPSの大きな事業として、科学研究費補助金事業があります。広く、薄く、ありとあらゆる分野の様々な研究者が申請できるもので、これは大事にしなければいけないと思います。

というのは、世界をリードする知を生み出す研究が、個人から出てくることがあり得るからです。特に今の時代には、インターネットの普及で、個人でも情報を集めやすい状況になっています。どこかですごい逸材が、地道にコツコツ研究をやっているかもし



本年（2012年）日本学術振興会は創立80周年を迎えます

1932年に設立された日本学術振興会。学術の振興を目的とする我が国唯一のファンディングエージェンシーとして、人文・社会科学から自然科学にわたる研究者の知的創造活動を総合的に支援してきました。創立80周年を記念して、JSPS Londonでは英国大学における日本のプレゼンス向上、国際共同研究促進のための様々なイベントを企画しています。

Symposia

開催日	開催概要
11月15, 16日	Building Resilient and Adaptable Infrastructure and Society- Drawing on Experiences of the Tohoku Earthquake at UCL
11月14日	JSPS' 80th Anniversary event
11月12, 13日	Smart Infrastructure and construction at Cambridge University
10月25, 26日	University museum at University of East Anglia
10月18, 19日	Energy Materials 2012 at Loughborough University
8月23, 24日	UK-Japan Symposium for Mechanochemical Cell Biology at University of Warwick
6月25, 26日	Mitochondria- from the fundamental aspects to medical importance at UCL

Alumni and JBUKⁱ networking events

開催日	開催概要
2012年秋	Alumni evening at JSPS London
10月31日	Alumni evening in Sheffield
8月15日	JBUK evening at JSPS London
6月20日	Alumni evening in Glasgow

ⁱ Japanese researchers Based in the UK

れませんし、それにその研究者の生み出した知が、どこでどういう風に使われるかも予想がつかない。そういう時代になってきているということです。「知のコモンズ」という状況は、昔のように基礎研究→応用研究→開発研究→経済的なイノベーション→マーケットでの利益という風に、直線的に研究が発展していくものとは違います。開発研究の種が基礎研究者にとって大きなヒントになったり、基礎研究があつという間に市場に出ていったりすることがあり得ます。基礎と応用というのがいろいろな意味でひっくり返って、入り乱れているのが現状です。そんな中でJSPSの役割としては、トップクラスの人達が国際的に共同研究をやる、ということを推進し、サポートしていけると良いのではないのでしょうか。

平松: 次の10年、20年規模のスパンで、JSPSは組織として、あるいは活動として、どういう方向性が望ましいとお考えでしょうか。

安西: 大学における学術研究、ハイレベルな教育、研究者養成、色々な道へ進むハイレベルな人材育成、それ全体の「受

け皿」として推進役になること、また、それを世界のトップレベルで持続させるということが、私が描いているJSPSの一つのあり方です。

平松: 「受け皿」について、もう少し説明していただけますか。

安西: それを推進する組織であり、ファンディングする組織であり、かつセクレタリアートです。日本が特に学術面の人材育成面で置かれている状況は、先進国はどんどん先へいって、中国、インド、韓国が追いかけてきていて、ともすると追いつかれるというところ。論文の数で見ると、日本はその中間にあります。欧米にもある意味で追いついていないし、中国などからも接近されているという状況です。そう考えますと、JSPSは先程申しましたように、80年の歴史を踏まえて、日本をリードする学術振興機関、人材育成機関、大学支援機関として新たに生まれ変わっていくことが、本当にこれからの日本にとって必須ですし、JSPSにとって重要な分岐点になると思います。

平松: ありがとうございます。

英国研究者キャリア開発の取り組み

2012年6月27日、石田東生筑波大学教授（学長補佐・教育企画室長）らが Skill development programme 調査のための渡英を機に、ここでは研究者キャリア開発のための英国大学の取り組みについて紹介する。

Vitae プログラムの報告書によれば、UK に居住する大学院卒の雇用率は 80% 程度で安定しており、そのうち 35% が研究職につく。アンケート調査回答者の 23% が研究者としての職を得、14% が Lecturers という結果になっている。これらの数字は、常勤のアカデミックスタッフへの道のりの険しさとその一方で大学院卒の半分以上は研究職以外のキャリアを選択していることを示している。

移転可能な技能¹ 獲得のためのトレーニングを行うためには資金が必要と提言した「ロバーツ報告書」が 2002 年に発



石田筑波大学教授（左）とともに

表され、英国政府は高等教育機関が博士課程在籍者に対して、明確なキャリア開発支援と研修を提供できるようにするための Funding を開始し、それらの資金を得た大学は戦略的に研究者キャリア開発プログラムを実施できるようになった。

特定の奨学生は受講が必須だが、それ以外は「強く推奨される」ととどまる。伝統的な教員からは“もっと研究に没頭すべき”という意見も根強く、必須になれば単位取得目的になることの方が問題とも指摘されている。移転可能な技能が習得できたかどうかは、自己評価の仕組みで「たとえケンブリッジの博士課程で研究しているとしても、人生のプラン B は用意しておくべき」と現場の担当者という。自分の将来をきちんと考えるものに対しサポートする、というスタンスでプログラムが用意されている。

（齋藤）

¹ Transferable skills are skills learned in one context (for example research) that are useful in another (for example future employment whether that is in research, business etc). They enable subject- and research-related skills to be applied and developed effectively. Transferable skills may be acquired through training or through work experience

2011 年度国際協力員の学術調査報告書「魅力的な研究者を育成するために—英国リサーチカウンシルのキャリア開発プログラム—」もご覧ください。報告書は[こちら](#)

Q 英国ではどんな料理が食べられるのでしょうか？

英国の料理といえば美味しくない・・・と日本人の間では思われているようですが、果たして実際はどうなのでしょう？

A 英国における料理は、30 年前に比べたら随分と美味しくなっています。パイ、フィッシュ & チップス、イングリッシュブレックファストなどの伝統料理は現在もありますが、それらはアフリカ、インド、中国などからの移民の影響を受けています。その結果、レストランのメニューやスーパーのインスタント料理は多種多様でかつヘルシーになり、現在では大変人気があります。また、カリスマシェフの出現も大きく影響しています。Jamie Oliver と Gordon Ramsey がその代表です。かれらは、異なる国の料理を融合させ、モダンでヘルシーな料理を簡単に素早く経済的に作る方法を英国内に伝授しました。現在、広く英国の人々の間に浸透し、レシピはスーパーやインターネット等で入手できます。この二人は、ここ 5 年の間に、英国と米国の人々にヘルシー料理を勧め、私たちがパパやテイクアウェイの料理よりも、自宅で新鮮な食材による料理を楽しみたいと思わせることに成功しました。今では、“Good Food fairs” や “MasterChef” などの料理番組を多くの人がテレビで楽しんでいます。英国において料理を美味しく作ることに對しての関心が全体的に高まっていることの表れではないのでしょうか。好みや考え方は日々変化していますが、世界で「英国の料理がおいしい」と評判になるにはまだ時間がかかりそうですね。

日本人の素朴な疑問に英国人ほりーさんが答えてくれます。なにか疑問に感じたら、①氏名 ②所属 ③住所 ④質問事項を明記のうえ、ニュースレター編集室 enquire@jsps.org まで、お送りください。質問採用者には粗品を差し上げます。

英国料理の
たまたま箱



t a m a t a m a k o

UCL シンポジウム

2012年6月25日～27日、University College London (UCL) にて日英共同シンポジウム“Mitochondria- from the fundamental aspects to medical importance”が開催された。本シンポジウムはJSPS Londonが実施する日英シンポジウム開催スキーム（在英日本人研究者会¹募集分）Phase 2として採択されたもので、2011年の同シンポジウムのフォローアップである。安川武宏シニアリサーチフェロー（UCL）がコーディネーターを務めた。ミトコンドリアに関心を持つ日英両国の研究者が再度一堂に会し、最新の研究成果を発表するもので、同時に当該領域における日本人研究者のプレゼンスを高め、ネットワークを拡大

し、日英共同研究を促進することを目的とした。日本から北潔教授（東京大学）、中田和人教授（筑波大学）、岡本浩二准教授（大阪大学）、小柴琢己准教授（九州大学）、有村慎一准教授（東京大学）が招へいされた。約40名がキャンセル待ちになる程の盛況で、ロンドンセンターの平松センター長他を含む合計100名が参加した。基礎から臨床まで幅広い分野から研究者が集まり、本テーマへの関心の高さを窺い知ることができた。

シンポジウムは講演の第一部と研究施設訪問、フリーディスカッションの第二部の2部構成となっており、第一部日英両国のスピーカーの講演セッションの初日（6月25日）は、Prof Patrick Maxwell

（UCL）の挨拶で幕を開けた。

シンポジウム期間中には特設ブースを設置して、JSPSの事業に関心のある研究者にフェローシップ等を説明した。また、午後の研究発表の間に、平松センター長の挨拶に続いて、Ms Watson International Programme CoordinatorがJSPSの事業概要を説明し、JSPS英国同窓会²会員のDr Robert Edgington（UCL）が日本での研究や生活を発表するセッションもあった。さらに、小柴准教授や岡本准教授が日本や所属の九州大学、大阪大学の紹介を行い、参加者はJSPSのプログラムや日本での研究生活に興味深く耳を傾けた。

2日目（6月26日）のプログラムは、Dr Gyorgy Szabadkai（UCL）の講演で始まった。安川コーディネーターの挨拶で第一部の幕を下ろすまで、2日間で合計17名の研究者が発表を行い、質疑応答時のみならずコーヒーブレイク時も議論が交わされた。

2日目午後からは第二部の研究施設訪問、フリーディスカッションが始まった。事前予約不要のため、UCLのみならず他の機関からの参加者も多く、また学生から教授までが参加するセッションとなり、3日目（6月27日）まで続いた。

「どの講演も科学的レベルが高く、また

活発なディスカッションで久しぶりに気分が高揚した」、「新たな人脈とアイデアの種を得ることが出来た」等の参加者からコメントがあり、また本シンポジウムを契機に3件の共同研究プロジェクトが既に始まっている。前回に増して日英研究者の連携が強化され、今後の当該分野の研究の発展が大いに期待される。

（安達）



シンポジウム当日の様子



安川武宏シニアリサーチフェローと

¹ 英国に研究拠点を置く日本人研究者から構成され、会員は2012年7月現在193名。

² 過去にJSPSフェローシップ事業により日本での研究を経験した研究者から構成される同窓会組織。会員は2012年7月現在360名。

Pre-Departure Seminar and Alumni Evening 開催

2012年5月25日、JSPSフェローシップ事業であるサマープログラム、外国人特別研究員及び外国人招へい研究者の3事業により渡日予定のフェローを対象としたPre-Departure SeminarがJSPS Londonにて開催された。当セミナーでは、派遣に際して事前に日本での研究・日常生活に関する情報提供を行い、不安を少しでも取り除くことを目的に例年5月と10月に開催している。今回は対象者51名のうち、36名の出席があった。

セミナーは、齋藤智副センター長の開会挨拶に続き、参加者から順に自己紹介を行い、お互いの研究分野や派遣先の情報共有を行った。引き続き、JSPS Londonから本会の事業概要、JSPS 東京本部人物交流課の山岡寧子係長からサマープログラム、佐藤亜希子係員より外国人特別研究員及び外国人招へい研究者について説明が行われ、その後、英国同窓会員であるグラスゴー大学のMr Jamie Cameron、リバプール大学のDr Zenobia Lewisから日本で体験した生活や研究環境について実務的なアドバイスがあった。続いて、British CouncilのDr Claire McNulty, Director of ScienceとRoyal SocietyのDr Kimberly Hutchings, Scheme Manager of Grantsから日本と

継続して共同研究を実施するための事業紹介が行われた。

セミナーの最後には質疑応答のセッションが設けられ、JSPS事業への質問や渡航に際しての相談が寄せられた。東日本大震災後の状況のほか、ビザ取得方法、事故や病気の際の保険の内容、受入先施設、滞在費のことなどの情報提供が行われ、参加者はメモを取りながら熱心に聞き入っていた。

Pre-Departure Seminarに続き、同窓会員とこれから出発するフェローのネットワーキングを目的としてAlumni Eveningが行われた。英国同窓会長であるDr Martyn Kingsburyが挨拶を行いBRIDGE ProgrammeやFURUSATO Awardなどの再招へい事業、日英シンポジウム開催スキーム、JSPS Londonが実施する80周年記念イベントについて話があった。歓談を挟み、総合科学ジャーナル「Nature」のDr Barbara Marteシニアエディターから国際連携の重要性についてゲストスピーカーとしてお話をいただいた。Alumni Eveningでは、リラックスした雰囲気に参加者間での会話も弾み、渡航前の不安も和らいだようだった。

(Watson)

※ Pre-Departure Seminar and Alumni Evening レポート全文は[こちら](#)

..... ❖ セミナー参加者からのコメント ❖

● Pre-Departure Seminar でのブリーフィングは楽しく得ることが多いものになりました。日本でお世話になるかもしれないJSPS 東京本部のスタッフに会えてよかったです。同窓会の方からもお話が伺えて有益でした。地震にどう備えるべきかわかりませんでした。説明で良く分かりました。基本的な日本語を少しでも知っておくことが大切だと刺激を受けました。早速AmazonでJapanese for Busy Peopleの中古本を購入しました。Domo arigato gozaimasu !

Professor Alan Hunter
Coventry University

● 日本への渡航が間近に差し迫った中で、Pre-Departure Seminar と Alumni Eveningにより、知識が深まりました。先輩フェローからのアドバイスが事前準備に役立つし、他の派遣者にも会うことができ有意義でした。先輩方が経験した素晴らしい日本文化の説明を聞き、日本への渡航が一層楽しみになりました。非常に貴重な機会でした。

Ms Melissa Gammons
University of Bristol



Pre-Departure Seminar and Alumni Evening 参加者全員と

世界トップクラスの大学グループ入り！ エクセター大学の挑戦

その大学は、まさに「破竹の勢い」という言葉が相応しい。

本年5月、春の陽気に導かれて西に歩みを進めた筆者らは、イングランド南西部にて、広大な自然の中にモダンな施設が建ち並ぶ University of Exeter を訪れました¹。

英国には、教育や研究の志向を共通にし、政府等に対して連名で要望や提言を行ったりする団体「ミッショングループ」というものがいくつか存在します²。同大学は、研究指向型の小規模大学で構成される「1994 グループ」という団体に属していましたが、本年8月1日より、大規模研究型大学で構成される「ラッセルグループ」への加入を果たしました³。ラッセルグループは、オックスフォードやケンブリッジをはじめとする英国の有名大



モダンな施設が並ぶキャンパス

学が名を連ね、「英国版アイビーリーグ⁴」とも称される世界トップクラスの大学グループです。

同大学研究支援部門のスタッフ⁵の協力を得て、グループからの招待につながった要因を捉えることができました。

まず、大学の研究収入がここ5年間で倍増しています。【図1】のとおり、大学全体の活動規模の拡大につながる総収入の増加と、それに寄与した研究収入のシェアの拡大には目を見張るものがあります。背景には、研究スタッフや研究施設への重点的な投資を通じて一流の研究環境を実現し、大学としての強みを伸ばしているという全学的な戦略がありました。大学は、同期間中に£2.3億（約276億円⁶）を超える投資を行い、英国中の優秀な研究者達をエクセターの地に惹きつけてきたのです。

また、学生からの評価も高く、毎年実施されている「全国学生満足度調査⁷」における結果は10位を下回ったことはないとのことでした。さらに、国内の主要全国紙による大学ランキングに関しても、【図2】に示すとおり、着実にその順位を伸ばしてきています。

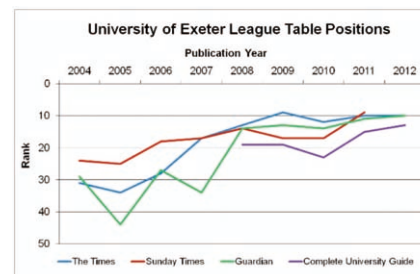
【図1】大学の研究収入と総収入の推移

(単位：£千)

年度	2006	2007	2008	2009	2010
(a) 研究収入	20,100	24,497	33,313	37,728	46,327
(b) 総収入	152,825	178,741	203,210	227,214	246,170
(a)/(b)%	13.2%	13.7%	16.4%	16.6%	18.8%

※ University of Exeter の“Financial Statements 2010/11”をもとに作成

【図2】英国大学ランキングにおける順位の推移



※ University of Exeter の Web サイトより抜粋

なるほど、世界に名を馳せるトップグループへの加入については、研究業績もさることながら、活動規模の拡大や学生をはじめとするステークホルダーの評判など、様々な面で実績を積み重ねていく必要があるということですね。

最後に、インタビューに協力して下さった Nela 女史の意気込みを。

「これからもっともっと稼ぎます。目指せ、年間研究収入£1億突破！そして、大学ランキングも5位ぐらいを目指します！」

(高橋)

¹ 大学の特徴や基本情報については、本号「Programme Introduction day in Exeter & Plymouth」(P.11) 参照

² 詳細は本号「学術調査報告」(P.16～) 参照

³ Russell Group of universities agrees to expand <<http://www.russellgroup.ac.uk/russell-group-latest-news/151-2012/5216-russell-group-of-universities-agrees-to-expand/>>

⁴ Harvard University や Yale University など米国東部の世界屈指の名門私立大学8校からなる連盟 <<http://www.ivyleaguesports.com/landing/index>>

⁵ インタビュー協力者：Dr Andy Richards (Manager), Ms Nela Kapelan (Event Organiser) いずれも Knowledge and Research Transfer 所属

⁶ £1=120円として換算

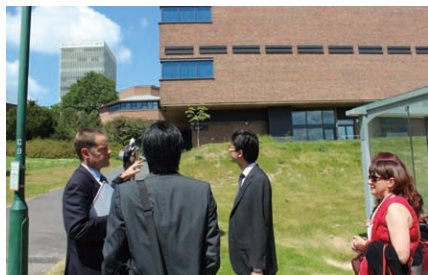
⁷ 英国内の大学等に所属している学生を対象とした満足度調査であり、大学等に対する助成金配分を担う公的機関 HEFCE の委託によって、年に一度実施 <<http://www.thestudentsurvey.com/>>

Programme introduction day in Exeter & Plymouth

2012年5月29日に英国南西部の University of Exeter、30日に Plymouth University にて JSPS 事業説明会を実施した。

最初に訪問した University of Exeter は、1855年に設立された School of Art を起源とし、Exeter Technical and University Extension College、University College of the South West of England、Royal Albert Memorial College を経て、1955年に現在の University of Exeter となった。人文・社会・自然科学の学問分野を網羅する総合大学で、英文学、演劇、法律、歴史、心理学が特に人気がある。同大学は学生約 19,000 人（EU 外の留学生比率は 20.3%）、教職員約 1,800 人を有する。Times 紙の英国大学ランキングでは 10 位に、全国学生満足度では 6 位にランクインしている。

当日は、Dr Andy Richards (Manager, Knowledge and Research Transfer)、Ms Nela Kapelan (Event Organiser, Knowledge and Research Transfer) と面



University of Exeter にて説明を受ける様子

会し、大学の概要説明を受けた。ラッセルグループへ招待されたこと、海外進出に注力しており、中国（北京・上海）及びインド（バンガロール）に事務所を設けていること、英国外の留学生は約 5,000 人（内 EU 外の留学生は約 3,900 人、日本人は 25 人）であること、学長が 2013 年 1 月に日本で広報活動を行うこと等を伺った。

事業説明会は Ms Kapela のコーディネートにより開催された。JSPS London からは齋藤副センター長他 3 人が出席し、30 名の参加者に JSPS の事業概要やフェローシップの説明し、日本での研究経験がある Dr Monica Craciun (College of Engineering, Mathematics and Physical Sciences) が日本での研究や生活について発表した。また、Prof Nicholas Smirnof (College of Life and Environmental Sciences) が JSPS に 2011、2012 年度に採択された二国間交流事業プロジェクト、工藤哲大シニアレクチャラー (College of Life and Environmental Sciences) が日英共同研究についてプレゼンテーションを行った。

Plymouth University は、1862 年に設立された社会・自然科学の学問分野をカバーする総合大学である。同大学は 30,000 人超の学生（EU 外の留学生比率は 6.6%）、約 3,000 人の教職員を有し、英国最大規模の大学である。Times 紙の英国大学ランキングでは 64 位に位置するが、“Enterprise University” をスロー

ガンに起業に注力し、ビジネス・インキュベーション設備は英国トップ 10 に入る。

事業説明会は、Prof Neil Avent (Head, School of Biomedical and Biological Sciences) のコーディネートにより開催された。JSPS London から、30 名の参加者に JSPS の事業概要やフェローシップの説明した。続いて、JSPS のフェローシップで来日した Dr Alan Scarlett (School of Geography, Earth and Environmental Sciences、2010 年度外国人特別研究員（欧米短期）) が日本での研究や生活について、Prof Des Mapps (Faculty of Science and Technology) は日系企業との産学連携の事例を踏まえて日英共同研究についてプレゼンテーションを行った。

その後、Prof Neil Avent、Prof Des Mapps、Dr Alan Scarlett と意見交換を行い、大学の概要説明を受けた。Plymouth University は、University of Exeter 等と共に CUC¹ を形成している。また、オリ



プレゼンテーションを行う安達国際協力員

ンピック規格のプールがあること、大学独自のマリンスポーツセンターを持つ英国で唯一の大学であること、海洋機構はヨーロッパ最大を誇ること、等を伺った。

日本での研究や生活、JSPS の事業に採択されたプロジェクト、日系企業との産学連携の事例等、経験者が実体験に基づき発表したため、参加者の関心を集め、詳細な質問が続いた。次回公募するフェローシップ等に両大学から何件の応募があるか今から楽しみである。（安達）

参考文献・URL

THE TIMES “Good University Guide 2013”

<http://www.exeter.ac.uk/about/facts/>

<http://www.plymouth.ac.uk/pages/view.asp?page=1060>

¹ CUC : Combined Universities in Cornwall コンウォール州大学連合

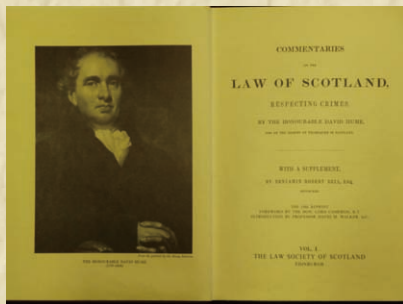
University of Exeter, Plymouth University, Peninsula Medical School, University College Falmouth, Cornwall College, Penwith and Truro College で構成。CUC はもともと高等教育機関が少ない Cornwall 州に高等教育を提供するだけでなく、施設や大学のスペシャリスト訓練コース等を共有し、世界トップクラスの研究者と連携できることで、地域経済に貢献している。

<http://www.cuc.ac.uk/>

スコットランド法でみる イギリス国家の多様性



平松幸三が
伺いました!



肖像画はヒューム判事（1757 - 1838。哲学者ヒュームは叔父）。
彼が著した刑法の体系書は、ローマ法における『法学提要』のよう
に、公式の法としての地位を認められている。

今回は、Visiting Scholar, School of Law, University of Glasgow（近畿大学法科大学院教授）上田健介先生より解説していただきます。

イギリスは、「連合王国」という一つの国家ですが、法の世界では、「イングランド・ウェールズ」「スコットランド」「北アイルランド」で別の法体系が存在し、三つの国ということもできます。

スコットランドをイングランドと比較すると、民事法では、不動産所有や相続・離婚時の財産分与の法が大きく異なります。婚姻関係でも、現在議論中の法改正が実現すれば同性婚が唯一認められる地域になります。刑事法でも手続の違いが大きく、陪審に「有罪」「無罪」の他「立証不十分」という第三の評決があることが有名です。

裁判所も、16・17世紀以来、Court of Session（民事上級裁判所）、High Court of Justiciary（刑事上級裁判所）が存在し、刑事裁判はロンドンの最高裁への上訴が認められず、ここで訴訟が完結します。法廷弁護士もイングランドの

Barrister に対し Advocate と呼ばれ、別資格です。

この背景には、かつて両者が異なる法伝統を持つ別の国家だった事情があります。1707年合邦法で連合する前から、スコットランドでは上の両裁判所によりローマ法の影響も受けた独自の判例法が展開しており、合邦法は両裁判所とその法を残す旨を定めていました。議会がロンドンに一歩化されたのと対照的で、独自の裁判所と法はアイデンティティの一つの柱となってきました（議会は1999年に復活）。

とはいえ、独自性を強調するのはいけません。商法、労働法、知的財産法、消費者保護法の分野ではほぼ同じ法が妥当し、またEU法の発展は両者に等しく影響を与えています。しかし、スコットランドで歴史的に独自の法が妥当してきた事実は、法がその土地の社会や文化を反映する点に鑑みると、イギリス国家の多様性と複雑さをよく示しているといえるでしょう。

Alumni Regional Event in Glasgow

2012年6月20日、スコットランドグラスゴーのStravaigin restaurantで15名の英国同窓会員、在英日本人研究者ほか一堂に会し、インフォーマルなネットワークイベントが実施された。英国同窓会スコットランド支部のマネージャーDr. James Fountaineにより企画され、同氏より開催挨拶が行われた。引き続き、研究や日本との関連等について各自より自己紹介があった。会ではJSPSの 프로모ーション活動や日英研究者のネットワーク構築について意見交換が行われた。本企画はJSPS 80周年記念イベント

の一環として行われたもので、次回は10月31日にシェフィールドにて開催予定である。(Watson)



Alumni regional evening 参加者全員と

..... ❖ セミナー参加者からのコメント ❖

●グラスゴーでの会に出席できてとても有益でした。異なる領域の研究者やアカデミックに携わる方とお会いでき、交流を深めるだけでなく、異分野の研究について詳しく知ることができました。日本での経験話し合い、日本をより知ることができました。次回のネットワークイベントが是非開催されることを心待ちにしています。

Dr Morgan Murray
School of Physics and Astronomy
University of Glasgow

●JSPS Londonの平松先生、スタッフと話ができ、JSPSの今後の活動内容を知ることができました。スコットランドを拠点として活動する日本人研究者や同地域の同窓会員と話ができ、物理学や法学といった私が普段携わる領域を超えて意見交換ができたことも良かったです。この種のネットワークイベントはありがたく、研究者としての見識を広げることができますし、学際的な連携のきっかけとなります。

Dr Tomoko Iwata
School of Medicine, University of Glasgow

Programme introduction day in Newcastle, Glasgow and Orkney

2012年6月19日～22日にかけてJSPS事業説明会開催等のため、英国内4大学を訪れた。最初の訪問先はEngland北東部、Newcastle市に位置するNewcastle University。同市は、タイン川を臨む美しい市街地にキャンパスが隣接しているという利便性や、ロンドンなどに比べ物価が低いという点、地元Geordie¹のフレンドリーな気質などから、学生の住みやすい街として定評を得てきた。大学の起源は1834年に医療系高等教育機関として設立されたことに遡り、現在ではラッセルグループのメンバーとして、癌や高齢化に関する研究で世界最先端の質を誇っている。2011年には

EPSRC²から、最も研究に優れた12大学の一つに選出された。研究に加え、教育でも高い評価を得ており、2011年の全国学生満足度調査によれば、最終学年の学生の82%が教育に満足していると回答。さらに、シンガポールやマレーシアに海外キャンパスを創設するなど、海外展開にも積極的な姿勢を示している。

事業説明会当日は、同大学のほか、近隣のDurham UniversityやNorthumbria Universityからの参加者も含め60名の出席があり、関心の高さが窺えた。平松センター長からの挨拶に次いで、本会の概要説明、フェローシップ事業の説明がなされた。その後、同大学のDr Dilum Dissanayake（2001年度外国人特別研究員事業〈一般〉採択者）による体験談があり、日本語での挨拶が研究室の仲間との距離を近づけたといったエピソードや、日本での共同研究中に多くの論文を執筆し一流の科学誌に掲載されたことがその後Newcastle Universityで高く評価され、教職を得るチャンスに結び付いたことなどが語られた。

6月20日に訪問したUniversity of Glasgow。同大学があるGlasgow市はスコットランドの南西部に位置し、産業革



事業概要説明を行う
Watson International Programme Coordinator

JSPS London Networking Event in Scotland JSPS London Networking Event in Scotland レポート全文は[こちら](#)

¹ イングランド北東部の人々や方言を指す

² the Engineering and Physical Science Research Council

命で工業都市として発展。近年は建築家マッキントッシュ³の影響を受け、洗練されたデザインと建築の街に生まれ変わりつつある。1451年、英国で4番目に設置された大学で、約半数の学生が30マイル圏内から入学しており地元学生が多いのが特徴である。一方で国際化にも力を入れており、世界120ヶ国以上から留学生を受け入れ、2011年には初の海外キャンパス University of Glasgow Singapore を Singapore Institute of Technology との協定の一環として開設した。ラッセルグループのメンバーでありバイオエレクトロニクス、ナノテクノロジー等の最先端研究をリードしている。2011年の全国学生満足度調査では最終学年の学生の教育満足度が90%に



齋藤副センター長による事業概要説明

達した。

事業説明会当日は、30名近くの出席があり、平松センター長からの挨拶、齋藤副センター長より本会の概要説明、次いでフェローシップ事業の説明を行った。その後、同大学の Dr Morgan Murray (2008年度外国人特別研究員事業〈欧米短期〉採択者)による体験談、Professor Andy Furlong から日英共同研究の話があった。

Newcastle, Glasgow と続き、6月21日、22日に Orkney 諸島の2大学を訪問した。University of Highlands and Islands Orkney College は、北欧学、考古学、農学の3部門があり、同部門の大学院博士課程もある。Dr Donna Heddle を含む3名の部門長から大学概要の説明があり、その後意見交換を行った。

次いで訪問した Heriot-Watt University Orkney Campus。地元では ICIT⁴ の通称で親しまれ、再生可能エネルギーを専門に扱う大学院キャンパスである。遠隔教育もあるほか ICIT と連携している近隣の EMEC⁵ で日本の企業が海洋エネルギーの実験を行うなど、外資からの注目度も高い。当日は JSPS 側から事業説明を行った後、オーガナイザーの Mr Colin R

Bullen を始め5名の研究者と意見交換を行った。

今回事業説明会を実施した大学の研究者より共同研究の問い合わせがあったと、日本国内の大学の先生より後日連絡を受けた。事業説明会の効果が早速現れて嬉しい。

(奥村、熊谷)



Heriot-Watt University Orkney Campus にて

奥村 Research Administrator が退任 (2011.1.12 ~ 2012.7.23)

【ごあいさつ】

1年7か月の間リサーチ及び庶務を担当させていただき、自分のキャリアの基礎となる貴重な経験をさせていただきました。特に、関係機関への報告書やニュースリリースの作成補佐業務を通じ、簡潔かつ明快な文書とは何かを学ばせていただいたことは、今後も大いに役立つと思います。また、データベース改修事業においては、各ステークホルダーへの対応と並行して、複数の作業をチームとして予定通り進めていくという難しい任務でしたが、結果的に自信に繋げることができました。さらに、英国大学での広報活動や助成採択者との交流は、我々が行う研究者支援の先にある可能性を感じられ

るという点で、仕事へのやりがいを再認識させてくれる印象深い機会でした。

最後に何より、ロンドンセンターの皆様から教えていただいたものは大きく、これまでの御指導に感謝の気持ちで一杯です。



³ Charles Rennie Mackintosh. スコットランドの建築家、デザイナー、画家。Glasgow School of Art 出身。

⁴ International Centre for Island Technology の略。

⁵ European Marine Energy Centre. ヨーロッパ海洋エネルギーセンター。2003年設立。波力や潮力を利用した海洋エネルギー実証実験、研究を行う施設。オークニー近海で、関連企業が実験を行っている。



これまで平静を装っていたロンドンも、
実際オリンピック聖火リレーがやってくるとこの人だけ。
各国の国旗が色鮮やかに並ぶ、ロンドン Regent Street にて。

2分でわかる！ 英国のミッショングループ【1/3】 ～共通利益を追求したシングルボイスの発信～

Point

- ・英国におけるミッショングループの特徴を体系的に整理
- ・トップグループだけでなく中堅層グループの声も政策への反映が実現
- ・ミッショングループ形成モデルは機能別分化のきっかけとなるか

Introduction

1994年某日、英国の学術会を牽引する20近い数の大学首脳陣が、ロンドン北部ブルームスベリーのホテルでティーテーブルを囲み、固い結束を誓い合った。ロンドナーの憩いの広場ラッセルスクエアに面したホテルの名はホテルラッセル、英国大学のトップリーグとして君臨するThe Russell Group（ラッセルグループ）¹の始まりであった。世界の大学界をリードするラッセルグループは、政府や議会に対して自らの利益を求めて積極的なロビー活動を行っており、英国の高等教育・学術政策において極めて大きな影響力を有している。

英国には、ラッセルグループの他にも、1994 Group（1994グループ）²やMillion+（ミリオンプラス）³、University Alliance（ユニバーシティアライアンス）⁴といった大学団体が存在し、これらは総称して「ミッショングループ」と呼ばれている。彼らは、教育や研究の志向を共有した自発的な集合体であり、政府等に対して共通の利益のために要望や提言といった形でシングルボイスを発信する、言わば圧力団体と

しての活動を展開している。

本報告においては、これら4グループの活動や加盟大学などの概要を紹介し、その特徴を明らかにしていきたい。

(1) The Russell Group

大規模かつ研究重視型の24大学で構成。オックスフォード大学やケンブリッジ大学をはじめとする有名大学が名を連ねる世界トップクラスの大学グループである。

グループの目的は、世界最先端の研究と教育を維持・促進するための最適なコンディションを保証することであり、加盟大学は、高度な専門教育によって各分野のリーダーを育てること、研究資金を確保して優れた研究環境を整備すること、最先端の研究を通じてイノベーションに繋がるアイデアを社会に提供することなどにより、英国の高等教育、ひいては英国の経済社会の発展に貢献することなどが求められている。

加盟大学のほとんどは英国の大都市に所在し、個々の大学の学生規模が大きく、英国の大学生の約5分の1（約50万人以上）がグループ大学に所属しているとされている。また、研究面に関しては、

グループの20大学（2008年度実績）で英国全体の研究費の3分の2を占めるなど、グループは、英国の大学セクターにおいて圧倒的な存在感を示している。

政府や関係機関に対する意見表明の活動は非常に活発であり、例えば今年に入ってから、平均して月6回程度のペースで関連するプレスリリースが行われている。

なお、ラッセルグループは本年、加盟大学の拡大を発表⁵し、8月1日より、Durham University、University of Exeter⁶、Queen Mary、University of London、University of Yorkの4大学を新たに招き、24大学での活動を始めたところである。



ラッセルグループの由来となったホテルラッセル

●ラッセルグループの加盟大学一覧

- (1) University of Birmingham (2) University of Bristol (3) University of Cambridge (4) Cardiff University (5) Durham University (6) University of Edinburgh (7) University of Exeter (8) University of Glasgow (9) Imperial College London (10) King's College London (11) University of Leeds (12) University of Liverpool (13) London School of Economics and Political Science (14) University of Manchester (15) Newcastle University (16) University of Nottingham (17) University of Oxford (18) Queen Mary, University of London (19) Queen's University Belfast (20) University of Sheffield (21) University of Southampton (22) University College London (23) University of Warwick (24) University of York

¹ The Russell Group Web サイト <<http://russellgroup.ac.uk/home/>>

² 1994 Group Web サイト <<http://www.1994group.ac.uk/>>

³ Million+ Group Web サイト <<http://www.millionplus.ac.uk/>>

⁴ University Alliance Web サイト <<http://www.unialliance.ac.uk/>>

⁵ Russell Group of universities agrees to expand <<http://www.russellgroup.ac.uk/russell-group-latest-news/151-2012/5216-russell-group-of-universities-agrees-to-expand/>>

⁶ 本号「FOCUS」(P.10)において、University of Exeterのラッセルグループ加入に関する詳細を紹介

2分でわかる！ 英国のミッショングループ【2/3】

(2) 1994 Group

研究重視で国際的知名度が高く、ラッセルグループよりも規模の小さい15大学で構成。上述のラッセルグループ設立に対抗する形で、1994年に設立された。

同じ研究重視型のラッセルグループ加盟大学と比較すると、大学あたりの学生数が少なく、比較的新しい大学が多い。また、ほとんどの大学が小都市に所在していることも特徴的である。

グループの目的は、加盟大学のグローバルマーケットにおける認知度を高め、政策決定者への影響力の大きさを示すこと、卓

越した研究及び教育の多様化と分散化を推進すること、大学職員や学生の経験を高め、優れた取組を共有すること、加盟大学が諸状況の変化に柔軟に対応できるよう有益な情報を提供することなどである。

グループは、月に2～3回程度のペースで関連政策に対する意見表出を行っている。また、研究基盤や研究評価、大学院教育など、多様なテーマに関する研究報告書の発行も行っている。

なお、上述の、本年8月1日にラッセルグループに新規加入した4大学は、それまでは1994グループの加盟大学であった。

おり、多方面にわたってエビデンスベースの調査結果を公表している。成果の一例として、グループは、大学の入学定員に関して需給の深刻なミスマッチを指摘

したことがあり、その結果、政府は2009年に1万人の定員追加措置を行ったという実績がある。

● 1994 グループの加盟大学一覧

(1) University of Bath (2) Birkbeck, University of London (3) University of East Anglia (4) University of Essex (5) Goldsmiths, University of London (6) Lancaster University (7) University of Leicester (8) Institute of Education, University of London (9) Loughborough University (10) University of Reading (11) Royal Holloway, University of London (12) School of Oriental and African Studies (13) University of St Andrews (14) University of Surrey (15) University of Sussex

(3) Million+

旧ポリテクニク⁷として1992年に大学の地位を認められた機関を中心に、多数の学生を抱える教育重視型の22大学で構成。1997年に“Campaigning for Mainstream Universities”として創設し、2004年に“the Coalition of Modern Universities”に改称、2007年に現在の団体名となった。

グループの目的は、あらゆる人々にとつ

て教育・研究・知識移転に秀でた大学へのアクセスを可能にするとともに、政府や産業界、非営利団体などが加盟大学の潜在能力を享受できるようにすることである。

グループは、政府などの政策発表に対し、ラッセルグループと同程度の頻度で活発に意見表出を行っている。併せて、高等教育を取り巻く複雑な問題に対処するためのシンクタンクとしても活動して

(4) University Alliance

2006年に創設された団体であり、主にビジネス領域を専門とする23大学で構成。

社会的・経済的課題に対して革新的な解決策を導くために産学官連携を推進していくことを目的としている。

加盟大学は、専門職教育や大学院教育の主要な提供機関として、英国全体の学生の約25%に対する教育を担っている。

1994グループと同様、月2～3回程度のペースで、関連する政策発表などに対する自らの意見表出を行っている。また、社会経済の利益につながる高等教育政策の改善のため、エビデンスベースの研究成果を提供する政策センターとしての活動も行っており、地域経済の発展や研究助成の在り方、大学の授業料など、多様なテーマに関する調査報告書の発行も行っている。

● ミリオンプラスの加盟大学一覧

(1) University of Abertay Dundee (2) Anglia Ruskin University (3) Bath Spa University (4) University of Bedfordshire (5) Birmingham City University (6) University of Bolton (7) Canterbury Christ Church University (8) University of Central Lancashire (9) University of Cumbria (10) University of Derby (11) University of East London (12) Edinburgh Napier University (13) University of Greenwich (14) Leeds Metropolitan University (15) London Metropolitan University (16) Middlesex University (17) University of Northampton (18) Staffordshire University (19) University of Sunderland (20) University of West London (21) University of the West of Scotland (22) University of Wolverhampton

● ユニバーシティアライアンスの加盟大学一覧

(1) Bournemouth University (2) University of Bradford (3) Cardiff Metropolitan University (4) De Montfort University (5) University of Glamorgan (6) Glasgow Caledonian University (7) University of Hertfordshire (8) University of Huddersfield (9) Kingston University (10) University of Lincoln (11) Liverpool John Moores University (12) Manchester Metropolitan University (13) Northumbria University (14) Nottingham Trent University (15) Open University (16) Oxford Brookes University (17) Plymouth University (18) University of Portsmouth (19) University of Salford (20) Sheffield Hallam University (21) Teesside University (22) University of Wales, Newport (23) University of the West of England

2分でわかる！ 英国のミッショングループ【3/3】

(5) Conclusion

4つのミッショングループの特徴を比較するための参考資料として、加盟大学の学生数や収入額、大学ランキングの結果、コース全体の平均授業料の平均値を比較したデータを【表】に示す。これにより、各グループにおける加盟大学の規模感や研究志向の程度、対外的な評価などのおおまかな傾向を捉えることができる。

英国には、全部で115の大学が存在し、その4分の3もの大学がいずれかのミッ

ショングループの一員として活動を展開している。ミッショングループは、高等教育・学術政策の大きな転換期などにおいて、政策の受け手、つまりプレイヤーとしての声を各々の立場から表明することで、政府主導の一方的な政策誘導を防ぎ、多様な意見を政策に反映させるという点において、非常に重要な役割を担っている。また、上記ミリオンプラスの成果例で示したように、ラッセルグループのような権威ある団体のみならず、中堅

層の大学によって構成されるグループの相も効果的に政策に反映されているという点も特筆できる。

日本では、2005年の中央教育審議会による答申⁸以降、「大学の機能別分化の促進」が高等教育行政における非常に重要な政策課題として位置づけられている。限られた資源を集中的・効果的に投入することを通じて、各大学の個性化・特色化を推進し、教育研究の充実、高度化を図るとともに、大学全体としての多様性の確保を図ることが命題とされているが、未だ、各大学の個性・特色の具体化には至っていない。一方、本年6月、文部科学省は「大学改革実行プラン⁹」を策定し、今後、中長期的な視点で、機能別分化を前提とした大学改革が本格化していく様

相を呈している。それぞれの大学が自らのアイデンティティを明確化し、共通の個性・特色のもとにグループを構成するという英国のミッショングループ形成モデルは、日本において機能別分化を具体化するためのきっかけの一つになるのではないだろうか。

日本においても、2009年に、日本を代表する研究重視型の11大学によって「学術研究懇談会（RU11）」¹⁰という大学コンソーシアムが組織され、政府への提言や声明の発表といったシングルボイスを発信する取組みが始まったと承知している。今後、このような動きが活発化し、中堅大学や地方の小規模大学などにも波及していくことが期待される。

（高橋）

【表】 ミッショングループの比較

ミッショングループ	創設年	大学数	学生数	総収入 (a)	研究収入 (b)	(b)/(a) %	ランキング	平均 授業料
The Russell Group	1994年	24	23,849	506,065	133,322	26.3%	18	8,960
1994 Group	1994年	15	12,773	165,406	25,004	15.1%	24	8,765
Million+	1997年	22	18,975	127,442	2,359	1.9%	96	8,064
University Alliance	2006年	23	31,860	176,223	6,237	3.5%	72	8,420

【出典】

- ^① 学生数：HESA（高等教育統計局）の統計“2010/11 students by Institution”より、2010学事年度における各大学の全学生数を抜粋 <<http://www.hesa.ac.uk/content/view/1897/239/>>
- ^② 総収入及び研究収入：Times Higher Education “Financial data for UK higher education institutions, 2010-11”より、2010年度収入額（単位：£千）を抜粋 <http://www.timeshighereducation.co.uk/Journals/THE/THE/12_April_2012/attachments/financial_data.pdf>
- ^③ ランキング：The Independentの英国大学ランキング“The Complete University Guide”における2013年度（入学者向け）の順位を使用 <<http://www.thecompleteuniversityguide.co.uk/>>
- * 大学院コースのみを提供する大学はランキング対象外
- ^④ 平均授業料：OFFAによる発表“Access agreements 2012-13”より、イングランドの大学等の2012学事年度における授業料平均額（単位：£）を抜粋 <<http://www.offa.org.uk/wp-content/uploads/2011/07/Access-agreement-2012-13-tables-with-intro.pdf>>
- * イングランド以外は、各国で異なる授業料システムを有しているため計算対象外

⁸ 「我が国の高等教育の将来像（答申）」（平成17年1月28日中央教育審議会） <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm>

⁹ 「大学改革実行プラン」（平成24年6月5日文部科学省） <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/1321798.htm>

¹⁰ RU11（Research University 11）Webサイト <<http://www.ru11.jp/index.html>>

このページでは、JSPSにて実施する国際交流事業やイベントなどを抜粋して紹介します。詳細は各事業ウェブサイトをご覧ください。

◆ JSPS が募集する国際交流事業

研究拠点形成事業

我が国において先端的かつ国際的に重要と認められる研究課題について、我が国と世界各国の研究教育拠点機関をつなぐ持続的な協力関係を確立することにより、当該分野において世界的水準または地域における中核的な研究交流拠点の構築とともに、次世代の中核を担う若手研究者の育成を目的として研究拠点形成事業を実施します。詳細は以下のとおりです。

受付期間：2012年9月6日～
2012年10月4日

採択期間：2013年4月開始
(最長5年間)

支給額：1課題当たり
2000万円以内/会計年度

申請方法：研究機関がJSPS東京本部に
申請

採用予定件数：10件程度

→詳しくは[こちら](#)



安西理事長来所 (2012年6月6日)

外国人特別研究員 (欧米短期)

欧米諸国の博士号取得前後の若手研究者に対して、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導を受け、共同研究に従事する機会を提供します。

< JSPS 東京本部受付分 >

申請受付期間：2012年10月5日(金)
～12日(金)

※申請は年6回受け付けており、次回は11月中旬の予定。

※申請者の所属機関によって機関内での締切日が異なりますのでご注意ください。

来日時期：2013年4月～2014年3月
の間に来日し、滞在期間は1
カ月以上12カ月以内

支給額：①往復航空券
②滞在費 362,000円/月(事業開始時に博士の学位を有する者)、200,000円/月(事業開始時に博士の学位を有しない者)

③その他(海外旅行傷害保険、
渡日一時金等)

申請方法：日本側受入研究者がJSPS東京本部に申請

採用予定件数：年間計60名程度

→詳しくは[こちら](#)

< JSPS London 受付分 >

2012年6月1日に、平成24年度(第2回)外国人特別研究員(欧米短期)の

申請を締め切りました。今回は2012年11月～2013年3月までの来日分にかかる申請であり、合計22件(自然科学14件、人文・社会科学8件)もの申請がありました。分野別では、生物学、日本学、地学、化学、宇宙工学及び芸術史学が比較的多く、材料工学、電気工学物理学、環境工学、数学、ビジネス経営学、政治学からも応募がありました。現在は英国ピアレビューによる書面審査を行っており、8月下旬に採用候補者が決定する予定です。

JSPS Londonでは年2回募集を行っており、平成25年度(第1回)外国人特別研究員(欧米短期)の申請は、10月上旬に受付を開始し、12月1日締切の予定です。

※日英交流事業の最新の公募情報は[こちら](#)よりご覧いただけます。

◆ JSPS London イベント情報

JSPS 事業説明会

JSPS Londonでは、定期的に英国内の大学等を訪問し、JSPSが実施する事業の紹介を行っています。最新情報は随時、当センターウェブサイトに掲載していきます。

所属機関にてJSPS事業説明会の開催をご希望の場合は、enquire@jps.orgまでご連絡ください。

◆ JSPS 各種情報を定期的にお届けします!

● JSPS London facebook ページ
facebook ユーザーの方には、公募情報や英国学術情報などウェブの更新情報をタイムリーにお届けします。

→  は[こちら](#)から。

● 在英日本人研究者登録
JSPS London が開催するイベントの案内やニュースレターなどを、在英日本人研究者でご希望の方に送信しています。情報提供を希望される方は、上記URLよりご登録ください。もしお知り合いで興味のある方がいらっしゃいましたら、本情報を転送いただけましたら幸いです。なお、対象となるのは、英国の大学・研究機関に所属する研究者(ポスドク・大学院生含む)、及び在英日系企業研究所の研究者です。

→詳しくは[こちら](#)

● JSPS Monthly (学振便り)
JSPSの公募案内や活動報告などを、毎月第1月曜日にお届けするサービスです(購読無料)。情報提供を希望される方は、上記URLよりご登録ください。

→詳しくは[こちら](#)

(安達)

編集を終えて

今年の夏は二つの山に登りました。一つはオレストヘッド。湖水地方にある標高265mの小山ですが、途中の泥濘、深い森林を抜け、たどりついた頂上の世界は言葉でいつくせない、格別な景色が広がります。

もう一つはニュースレター。編集会議で大まかな道筋は立てますが、質の高い情報提供を求めて模索状態が続きます。無理して字数を削った原稿が、編集するとページに合わず、急遽別記事をお願いすることも。内容がオーバーラップすることもあり、スタッフで話し合いを続けます。皆で意見を出し合い、一つずつピースを作成、そして・・・新号が完成！

できたときは何ともいえない嬉しさが込み上げてきます。執筆していただいた皆様に感謝です。感慨に浸りつつ、更にも上を目指して作成に取り組みたいです。

(熊谷)

監 修： 平松 幸三
編 集 長： 齋藤 智
編集担当： 熊谷 純一



JSPS London

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)

14 Stephenson Way, London NW1 2HD United Kingdom

TEL: +44-(0)20-7255-4660 / FAX: +44-(0)20-7255-4669

email: enquire@jps.org Website: <http://www.jps.org/>

Find us on
facebook